

鈴木商店調査書「樟脳及薄荷製造業」（原書 P25～33）

樟脳製造業は明治^{さんじゅう} 卅 五六年頃、男爵後藤新平氏が台湾総督府民生官たりし当時、鈴木商店が同地にて樟脳製造に指を染めたるに始まり、^{じらい} 尔来樟脳、^{りゅうのう} 龍脳及原料樟脳製造を經營せるものにして本邦樟脳生産額は鈴木系統^{そのた} 其他を通じ約四百萬斤内外に達し、之を需要方面より見るときは内地二十萬斤内外、^{いんど} 印度百四拾萬斤内外、米国及^か 加奈陀百萬斤内外、欧州諸国百四拾萬斤内外を示せり。

内鈴木商店側に於て製造に係るもの約二百八拾萬斤に達し、^{そのた} 其他再生樟脳、龍脳、薄荷油等の全部に対し約五百六拾萬円の投資額に達せり。

左に各工場に就き略述すべし

樟脳製造

製造所 日本商業会社樟脳精製所（原書 P25～26）

神戸市葺合雲井通五丁目三十九番地

固定資本 七萬円内外

年産額 貳百萬斤内外

此価額 參百七拾萬円内外

沿革 現況

同工場は^{にじゅう} 廿 余年前、住友家の創設に係り經營し来りしが、収支常に^{あいつくた} 相償はざりしに依り去る明治^{さんじゅう} 卅 六年、之を鈴木商店に譲り渡したるものにて、^{じらい} 尔来同店は藤田助八（原文ママ。正しくは“助七”）氏名義に依り經營し同四十二年二月、株式会社日本商業会社を設立し、同社の經營に属せしめたるもの也。

年産額二百萬^{ないし} 乃至二百五拾萬斤にして、販路は内地向拾五萬斤内外、^{いんど} 印度向拾萬斤内外、^{ほか} 外は全部欧米向輸出品なり。目下男女工九十名内外を使用し居れり。

製造所 合資会社^{ふきあい} 葺合樟脳精製所（原書 P26～27）

神戸市葺合^{おの} 小野柄通三丁目

投資額 資本金七萬円也 払込済

年産額 參拾萬斤

此価額 五拾萬円内外

沿革及現況

同社は明治四十四年三月、資本金拾萬五千円を以て英国人エス・イー・ルカス、畠山作四郎、船井長治、藤野久吉等によりて設立せられたるものなるが、^{とにかく} 成績兎角面白からざりしを以て大正二年、遂に鈴木商店の手に^{まか} 委せられたるものなり。^{じらい} 尔来同店にては之が整理を為し、資本金を七萬円に減少し經營^{おおい} 大に努めし結果、漸次収益を見るに至れり。年産額參拾萬斤内外にして販路は^{いんど} 印度向小型物を主とし、目下男女工百貳拾名内外を使用し居れり。

製造所 神戸樟脳精製合資会社（原書 P27～28）

神戸市八雲通六丁目七番地

投資額 資本金四萬円 払込済

年産額 四五拾萬斤

此価額 八拾萬円内外

沿革及現状

同社は明治^{さんじゅう} 卅五年、現社長落合午太郎氏及故後藤勝造氏に依りて設立せられしものなるが、経営難の爲め大正元年頃、後藤氏は自己の持分を鈴木商店に譲り退社するに及び、^{じらい} 尔来常に同店の融通を受け、表向落合氏及後藤鉄次郎、田辺良吉の三氏の出資社員なるも、内実鈴木商店の経営たりと云ふ。年産額五拾萬斤、販路は欧米、^{インド} 印度方面にして目下男女工九拾名内外を使用せり。

再製樟脳製造（原書 P28～30）

製造所 鈴木商店小野濱製脳所

神戸市旭通四丁目

製造所 鈴木商店^{わきのほま} 脇濱製脳所

神戸市脇濱一丁目

固定資本 貳拾萬円内外

年産額 貳百五拾萬斤^{ないし}乃至參百萬斤

此価額 貳百萬円^{ないし}乃至貳百五拾萬円内外

前記両所共、再製を専門とせり。由来再製業は後藤男爵が民営長官たりし当時、特に同店にのみ特許せられしものにして、現に本邦に於ける唯一の樟脳再製業者なり。

^{しこう} 而して、再製は樟脳生油を以て原料となし、粗製樟脳を製造するものなり。生油は内地産及台湾産のものにして、同業が如何に有利なるかは其^{その}独占的事業たる事なりとす。

因みに、^{わきのほま} 脇濱製脳所は新式の機械設備^{ほどこ}を施し、拾數萬円を投じ将来益々拡張する計画なり。但、去^{さる}八月火災に罹り全部焼失の厄^{やく}に遇ひ、目下之が復旧工事に多忙^あを極め居れり。

^{りゅうのう} 柳田 龍 脳製造所（原書 P30）

同所は市内^{わきのほま} 脇濱一丁目^{ないし}に工場を設置し、主として薬用及化粧品原料用樟脳を精製し、年産額拾五萬円内外に達せり。

鈴木商店台北樟脳工場（原書 P30）

大正三年頃の開業にして、台北廳古亭村庄一四四番戸に工場を設置し、^{おもてむき} 表向台湾塩業会社の経営なるも、事実鈴木商店の経営なり。投下資本數萬円、年産額精製樟脳拾萬斤^{ないし}乃至拾五萬斤内外なり。

臺北精製樟腦株式会社（原文ママ。正しくは“臺灣精製樟腦株式会社”）（原書 P30～32）

設立 大正六年八月

目的 樟腦製造販売業

資本金 壹百萬円也（払込 貳拾五萬円也）

重役の氏名

常務取締役 飯沼剛一（三井側） 同 平高寅次郎（原文ママ。正しくは“寅太郎”）（鈴木側）

取締役 羽鳥精一（三井側） 同 山崎市太郎（ 〃 ）

同 竹内虎雄（鈴木側） 同 園田太郎（ 〃 ）

監査役 加地利夫（三井側） 同 北尾直樹（鈴木側）

沿革及現況

同社は従来台湾より三井物産会社の手を経て粗製樟腦を海外に輸出し居りしも、精製品として輸出する方遙かに有利なるを以て、今回三井物産会社及鈴木商店合同にて将来台湾樟腦の大部分を精製する計画にて、年産額貳百萬斤内外の予定なり。而して、工場は台北三板橋大竹園芳讓社西隣に土地を買収し、既に工事に着手し居れり。

薄荷製造業

鈴木商店薄荷工場（原書 P32～33）

製造所 神戸市磯上通四丁目

固定資本 拾萬円内外

年産額 五拾萬斤

此代価 二百萬円内外

沿革

同業は明治三十五年頃の創業に係り、主として欧米方面の輸出にして北海道及三備^{さんび}地方を原産地とす。製品は薄荷腦五割、同油五割位の割合にて、時価前者は百斤に付七百円内外、後者は貳百円内外なり。而して、原油は目下参百五六拾円を唱え居れり。

元来薄荷は価格の騰落^{はなはだしく}甚敷、一面危険性を帯びるも、他面亦興味ある事業なり。故に小資産家は之に依りて破産し、或は巨富^{また}を贏ち得ること敢て珍らしからずと云ふ。

尚、同店の前記樟腦、薄荷事業に投資せる金額及年産額、約左記の通り^{とおり}なり。

年産額 壹千百萬円内外

固定資本 六拾五萬円内外

運転資本 五百萬円内外